社会運動論研究会

代表者：YANG Yushuang（社会学研究科博士後期課程1回生）
研究会メンバー：Ouyang Shanshan（先端研究科一貫制博士課程4回生）、栗川治（先端研究科一貫制博士課程4回生）、山口和紀（先端研究科一貫制博士課程1回生）など

問題意識と解決すべき課題

従来国家／政権を敵手とした社会運動を中心に構築された社会運動理論と異なり、文化的分析が社会運動研究に新しい視点をもたらした。先行研究では、女性、LGBTQ、障害者の社会運動は社会的マイノリティーの視点を通じて、伝統的な社会運動と異なる権力構造が明示されてきた。しかし、異なるマイノリティーの属性はどのように制度、文化、運動参加者、他アクターと相互作用しながら、自分の運動主張を訴え、運動の展開と結果に影響したのか、そのメカニズムをめぐって既存の概念と研究成果をさらに発展する必要があると考えられる。本研究会は各メンバーの独自の事例研究を沿って、この課題をめぐり、社会運動論の概念と理論を検討しながら、それらの有効性とさらなる発展の可能性を模索する。

目的 ▌マイノリティ社会運動の理論動向

社会運動をめぐる理論・事例研究を検討することを通じて、ジェンダーと性的マイノリティの社会運動を考察する際の理論的動向を把握する。とりわけ社会運動論における集合的アイデンティティ、連帯（Solidarity）、感情（Emotion）、多制度政治（Multi-institutional Politics）といった分析概念をジェンダーとセクシュアリティ運動の文脈において再検討し、抗議活動の出現、発展、結果、運動組織の形態、戦略、言説、イデオロギーなどについての理解を深める。

開催内容 ▌運営計画会議を含む通算8回開催

★論文講読会　７回

運動論に関する文献・論文の輪読を行うことを活動の基本とし、担当メンバーがレジュメを作成し、発表した。各メンバー自身の研究事例の検討報告も行った。

研究成果と発表実績

社会運動論における2つの理論潮流―「資源動員論」と「新しい社会運動論」―について理論発展、重要概念、および方法論を把握した。各メンバーは研究会で得られた知見をまとめ、学会参加した。また、関連記事も掲載された。

【学会発表・査読あり】

○Yang Yushang, Exploring Anger in Everyday Online Feminist Practice. International Postgraduate and Academic Conference 2022 (IPAC 2022), 18th February, Japan.

○山口和紀，「健全者手足論は『いつ』提起されたものだったのか―機関紙の分析から」. 障害学会18回大会, 自由報告. 2021年9月.

【記事】

○山口和紀, 20210729 「権利獲得目指した障害者運動の歩み語る　「茨城青い芝の会」60周年記念誌」, NEWSつくば .

ーーーー, 20220116 「追悼、里内龍史さん　障害者の権利獲得目指し闘い続けた」, NEWSつくば.